

事例報告；自学自習をベースにした遠隔学習 「通信コース」の試み

平城真規子 斎藤ひろみ 田中義栄
山本 京子（福島県自立研修センター講師）

目次	0．はじめに
	1．プロジェクトの目的・研究の課題
	2．プロジェクトの概要
	3．自学自習用会話教材開発のコンセプト
	4．事例報告
	4-1．学習者データ
	4-2．本コースの目的
	4-3．プログラム設計
	4-4．通信による学習の経過と状況
	4-5．考察
	5．事例報告
	5-1．学習者データ
	5-2．本コースの目的
	5-3．プログラム設計
	5-4．経過
	5-5．考察
	6．事例報告
	6-1．習者データ
	6-2．本コースの目的
	6-3．プログラム設計
	6-4．経過
	6-5．考察
	7．終わりに

0．はじめに

職場や家庭で多忙な生活を送る定住型外国籍住民は、それぞれのライフステージの中で、時には日常の生活課題を解決するために、また時には生活の質の向上を求めて、日本語をレベルアップさせたいと願うことがあるのではないだろうか。しかし現実には、通える距離に学習の場がないとか、通える距離であっても時間帯が合わないとか、あるいは教室が自分のニーズやレベルに合っていない等の事

情から具体的な学習行動に結びつかない人もいだろう。一方日本語教室等の支援者からは、「若い人や壮年の人は、日本語が伸びそうだと期待していても、結局仕事等で休みがちになり、いつの間にか来なくなることがしばしば。」との声も聞かれる。成人学習者は、学習よりも生活上のノルマを優先させねばならない上、重労働に従事する者も多く、教室等に通い続けること自体が容易ではないのだと想像される。

中国帰国者定着促進センター（以下所沢センター）は、これまで、地域に定着した帰国者^{注1)}の学習機会を広げる一方策として通信教育による日本語学習支援の可能性を模索してきた。^{注2)}99年度も、所沢センターの講師を中心に「遠隔学習支援研究会」を立ち上げ、「通信コース」を試行した。（これは99年度の国立国語研究所の研究委嘱を受けている）。特色としては、学習者の生活者としての事情を考慮し、仕事や生活の合間を縫って活用できる自学自習用教材を提供する一方、通信手段を用いて自学自習を促進するための側面支援を行ったことである。試行にあたっては、福島県中国帰国者自立研修センター（以下福島センター）と所沢センターが連携し、福島センター再研修講座^{注3)}の中の「通信コース」として、県内在住の学習者3名を対象にパイロットケースとして実施した。本稿ではこれら3名の事例と共に、自学自習を支援するといった場合に核となるべき自学自習用教材開発の考え方等を含めて報告する。

1．プロジェクトの目的・研究の課題

一般にいう「自律的学習」「自己学習」とは、自分で学習課題を見つけて取り組み、必要に応じて学習のやり方を調整したり、成果を自己点検したりする等、学習過程を自己管理しながら学ぶことである。また本稿でいう「自学自習」とは、教室のような教授者と学習者との双方向的学習活動に対して、学習者が日常的に、自宅などの場で余暇時間を活用しながら行う個人的な学習活動を指す。

私たちのプロジェクトは「帰国者が日本社会の中で、生活を営みながら日本語を学んでいくという場合、自己学習能力とは具体的にどのような能力を指し、それはどのようにして高められるのだろうか。また帰国者の自学自習を側面から支援するためには、どのようなことが必要となるのだろうか。」という問題意識をもって出発した。

私たちが想定する学習者は、中国での様々な生活背景・経歴を持った人たちである。外国語学習のための基本的学習技能を含め、必ずしも自学自習という方法に馴染んだ人ばかりではないだろう。学習適性を知る1つの手がかりとして中国での外国語学習歴を見ると、例えば所沢センターの過去2年間の30～50代の修了生のデータでは、外国語学習歴のある者は29.3パーセントに過ぎない。さらに呼び寄せ家族の場合は、来日後定着促進センターや自立研修センター等の学習機関で学んだことがないため、日本語の基本的学習技能を十分に身につけなかった者も多いと予想される。その他、学習情報を含めたりソースの入手に困難を伴うなど種々のハンディが考えられる。

一方生活者としての側面をみると、30～50代は働き盛りで、家庭での役割も大きい。学習を専業とする場合とは異なり、いわばパートタイム学習者として、生活の隙間を縫って学ぶ人が多いと考えられる。

私たちは本プロジェクトの支援対象として、自学自習に馴染んだ人や一定の学習条件を備えた人だけではなく、学習に不慣れで、学習条件に恵まれない人をもその視野に入れたいと考えた。

さまざまな制約の中にある帰国者の自学自習を促進し、自己学習能力の伸張を助けるために必要な支援とは何か。本プロジェクトの通信コースでは、学習者の生活や学習の実態等も把握しつつ、帰国者の自学自習を支援するといった場合の基本的な考え方や方法を探りながら、プロジェクトを進めることとした。その中心課題は

自学自習用教材の開発・既存教材の自学自習向け改訂

「通信」による支援の目標・内容・方法の研究

である。なお「通信コース」の「通信」とは、「遠隔学習」つまり時間的にも空間的にもへだたりのある学習者と支援者を、教材や音声テープの郵送だけではなく、ファクシミリ、電話、パソコン通信といった通信テクノロジーによって結びつけることを指す。

2. プロジェクトの概要

通信コースの期間は約4ヶ月とし、以下のような実施手順を想定した。

対象者決定

学習者データの収集

教材開発およびプログラム設計

試行

学習状況の把握・評価・プログラムの修正

再試行

評価

プログラムの内容や学習進度によっては4ヶ月コースで複数のプログラムが実施可能である。上記で収集した学習条件や日本語レディネスを参考に支援者側が大まかなプログラムを作成し、初回スクーリング(後述)の学習相談を経てプログラムを決定する。で得たフィードバックを踏まえ、でプログラムの変更の余地を残すなど柔軟に対応することとした。

対象者は、以下のいずれか、または両方に該当する者で、所沢センターが提示する教材メニューの中に学びたい内容がある者とし、候補者選定を福島センターが行った。

- ・通学が不便あるいは多忙等の事情から、通常の再研修講座に継続的に通えない者
 - ・通常の再研修講座のコースの学習目標と異なるニーズを持つ者
- 通学方式に比べ、学習は孤独であり、強い意志や努力を必要とする自学自習方式では学習動機の強弱が鍵であると考え、学習者選定にあたっては、学習者自身がプログラムを選択するという手順を重視した。学習適性については、非識字・半識字者以外という他、特に条件は設けていない。
- ・学習者は、学習計画に基づき、余暇時間等を利用して自学自習する。
 - ・所沢センターは、学習進度に合わせて自学自習用教材を郵送する。
 - ・担当する講師あるいはサポーター^{注4)}は学習活動の一環として、定期的に学習者との間で課題のやりとりまたは会話練習などのペアワークを行う。また必要に応じて質問への回答、学習上のアドバイス・励まし等の援助を行う。
 - ・方法は、郵便・ファクシミリ・電話のいずれか、あるいはそれらを併用する。具体的にはプログラムの内容と学習者側の条件とを照らし合わせてケース毎に決定する。
- なお本プロジェクトでは開始時、中間時、終了時に、評価と学習相談を兼ねた

スクーリングを実施する。

本コースでは最終的に次のような対象者、使用教材、担当者の組み合わせが決定した。

学習者	教材名	支援担当者
ケース (30代/主婦)	話してみよう子どものことを	所沢センター講師
ケース (50代/無職)	日本の生活とことば「病院」「面接」	所沢センター講師
ケース (40代/有職)	こんなとき会話「バス道聞き」「買い物」「職場」	所沢センター・福島センター講師

3つのケースとも目標が会話能力の伸張という点で共通点がある。表中の
で用いられる教材は、自学自習用として新たに開発したものである。このうち
は通信コースに先駆け完成していたが、は通信コースの進行に合わせて、作成
作業を進めた。または所沢センターの『日本の生活とことばシリーズ』^{注5)}を
ベースに自学自習用として若干の改訂を行ったものである。

ケースは、サポーターが通信によるペアワークを担当し、福島センター講師
は、スクーリングの機会を通じて、学習者とサポーターの関係を調整する役割を
担った。これは「日本語通信ネットワーク」方式とも呼ぶべき方法で詳細は後述
する。

3. 自学自習用会話教材開発のコンセプト

帰国者は日常生活の中で、無意識的あるいは意識的に学習を行っている。ある
帰国者の体験談を聞くと「(職場では)どんな状況で、どんな言葉が発せられ、そ
れを聞いた人がどんな行動を取るのかをいつも必死で見ていた。すると言葉の意
味が段々わかってきた」という。おそらく「インプットと同時に、その場の状況
や発信側・受信側の口調、態度、それによって引き起こされる行動の観察 言
葉の意味の類推・理解 模倣(再生) 検証」といった過程を繰り返す中で、
言葉を獲得していったのであろう。また「インプット 理解 模倣」を繰り返
す中で、表現に共通する規則性を徐々に理解し、応用力が養われていったと推
測される。音声の吸収・定着において優れている若い層では特に環境の中で言葉
を習得する能力が高いことが言われてきた。しかし、若い層でも言語環境に恵ま
れない場合は、インプットが少ないため、学習は遅々として進まず、帰国後何年
経っても日常会話で不自由する。会話能力の伸張にとって音声学習の重要性は言

うまでもないが、自学自習用教材として音声テープを主体にした教材を作るに際
し、日常生活での習得のメカニズムもヒントにしたいと考えた。すなわち「イン
プット 理解 模倣」の流れを基本に、スモールステップによる練習を盛り込ん
で効率よく定着を図る。音声テープは映像による助けがないことから意味は中国
語で導入する、といった考え方である。その他自学自習用として次の点を念頭に
置いた。

役立つ・おもしろい

生活上の問題解決や話題中心に構成され、身近な問題として興味・意欲が
生まれやすくする

どこにいても、何をしていても学べる

机上の学習時間は限られたものと想定し、テキストを離れて、付帯するテ
ープを聞き流しすれば、「ながら学習」できるものをめざす。

手間入らず、人いらず

多くの教材は講師の存在を前提としているが、講師に代わる指示の声に従
えば、スモールステップで練習ができることから、自学自習に不慣れな人
でも自力で学習できる。中国語対訳を付け、辞書や参考書、解答等を見る
手間を省く。

教材は音声テープとテキストのセットである。例として開発教材の一つである『こ
んなとき会話』シリーズの各課の構成を述べる。

テキスト(左頁:日本語/右頁:中国語)	音声テープ(印はあるもの)
ロールの提示(場面説明)	
モデル会話	3回繰り返し 1回目:自然な速度 2回目:ややゆっくり、中国語付 3回目:自然な速度
ことば(中国語による語彙の説明)	日本語2回読み、中国語付き
本文のポイント(中国語による文型説明... 解析力をつけるのではなく、意味の理解を 助け、安心感を付与)	
覚えよう(記憶練習)	間をおいて、解答が流れる
話してみよう(代入練習)	間をおいて、解答が流れる
聞いてみよう(大意を類推...キーワード、 背景事情、文脈、声の表情等をてがかりに	日本語2回読み、中国語付き

類推力を養う)	
	総復習 ・モデル会話の聞き取りチェック ・テープの声を相手にモデル会話の発話練習
一口メモ(日本事情説明)	

テープでは各課毎にすべて2回ずつ録音されており、2回目は日本語のシャワーをあびるという目的で中国語の指示や説明を除いた。

自学自習用会話教材を評価する際の観点については以下のように整理した。これらは将来教材を改善する段階で作成者として自己採点したり、また使用者から評価を得たりする時の評価基準として用いることにした。

1) テキストの内容・構成

- ・学習者が自己のレベルやニーズに照らして、適切に教材を選択できるように案内があるか
- ・習得のプロセスに則ったスモールステップ(導入 練習 自己チェック)になっているか
- ・会話場面あるいは話題の設定が適切か(実用的であるか、ニーズに合っているか)
- ・語彙・文例・会話内容が適切か
- ・文法・文型の母語による解説が付いているか、解説はわかりやすいか
- ・単語や会話に母語訳が付いているか
- ・ルビが打ってあるか
- ・練習問題は自己チェック用の解答付きか
- ・言語の背後にある文化的側面への理解が促進されるか
- ・学習者と周囲の日本人とのインターアクションを促進する内容になっているか

2) 形態

- ・ページ・レイアウト、カット等見た目の使いやすさやはどうか
- ・文字の大きさは見やすいか
- ・持ち運び・扱いやすさの点で、テキストの外形はどうか

3) その他

- ・音声テープの速度、間、構成等は聞き流し用として適しているか

4. 事例報告 1

学習者	学習目標	使用教材名	支援担当者
30代/女性	会話力の伸張	話してみよう子どものことを	所沢センター講師

4-1. 学習者データ

学前アンケート(資料1)および第1回スクーリング(教材送付後10日目に実施)を通じて以下のような学習者データを収集した。

属性：孤児二世 家族：夫・娘(小1) 来日時期：1996年7月 職業：無

日本語学習歴：宮城県自立研修センターで研修4ヶ月、その後福島県自立研修センターで研修4ヶ月、その後同センター再研修講座を半年受講

日本語レベル：

学習者による自己評価

自分自身のことや生活面で必要なことについてやりとりができる。ただし、自分の考えを筋道立てて話すことはまだできない。日本人同士のおしゃべりが大体聞き取れる。年賀状や挨拶状などの決り文句を使った文が書ける。

担当者による評価(会話力について)

コミュニケーションはかなりうまくできるし、相槌なども自然で、ぎこちなさがない。また、話の入り方がなめらかである。自分のことや簡単な内容については考えなくても直ぐに返事が返ってくるし、知っている言葉をうまく使ったり、コミュニケーションストラテジーを使用したりしている。会話を通して、その場面で必要な言葉や表現方法を学んでいる。そのため職場で使う仕事関連の言葉などをよく覚えている(例：U字溝)。

総合所見：子女がこの春(99年4月)小学校に入学し、保護者として子女の担任や他の保護者と接する機会が増えた。しかしそのような場で他の人の話は聞いてわかるのに自分の考えを自由に伝えることができないという不全感を持っている。当然ながら子女の学習状況や学校生活の様子にも関心が高く、教材の内容にも興味を示した。教材を手にしてから、目標スキルを話す力と聞く力に絞り、すでに自分なりの方法で(家事をしながら聞き、わからない所をテキス

トで確認するなどして) 学習をスタートさせていた。
現在妊娠中である。そのため土木関連の仕事を止めたが、軽い仕事が見つければ再就職を希望している。

明るく積極的で話好きな印象を受けた。また、細かいことにこだわらず、間違っても余り気にしないタイプのものである。

4-2. 本コースの目的

初級レベルの日本語の学習が終了し日常生活上の会話には困らない程度の日本語能力を有し、時間的にゆとりのある学習者を対象に、通信による日本語学習支援を行い、継続的に自宅学習を進められるようにするための支援のあり方について考察する。

一定程度の会話能力のある学習者に対し、本人の興味関心のある分野について会話力を伸長させることを目標とし、自宅で学習を継続できるよう教材を提供する。また、定期的に課題を提出させる、スクーリングを行う、話し合っただ学習の進捗を決めるなどの具体的なアドバイスや示唆を与え、自分で学習ペースを管理して学習を続けていく方法を身につけられるように支援する。

課題へのフィードバックやスクーリングでの会話練習により、学習成果の自己評価を促す。また、スクーリングで学習相談を行い、学習目標の再設定、学習方法の検討、その後の学習計画を立てるようアドバイスし、自分の学習目的にあった学習のあり方を模索していけるように支援する。

4-3. プログラム設計

学習目標(学習者にとっての):

役に立つ言葉や、言葉のより適切な使い方を覚えて、子どもについて話す時に「通じる」(現在のレベル)以上の会話力を身につけ、先生や他の保護者と積極的に関わろうとする姿勢を持つ。

中断していた日本語学習を生活の一部として位置付け、諸条件や目標を意識して学習方法を考えながら一定のペースで継続的に進めていく。

学習期間:平成11年10月5日~12月23日

教材:本プロジェクト開発教材『話してみよう 子どものことを』、 、 (対

象は初級文法は既習で簡単な会話ができる学齢期の子どもを持つ学習者等)

学習方法:

学習ペースを決め、教材(音声テープ含む)を利用して自学自習
課題(テキスト各冊 同トピックのヒアリング/会話録音)提出
スクーリングで(開始時、中間、終了時の3回)会話練習、学習相談

支援方法:

定期的に教材・課題を送付
課題のチェックとフィードバック(以下表中ではFB)
電話による質問受けと学習方法に対するアドバイス
スクーリング時の会話練習、学習状況の把握と学習相談

学習計画表

時期	学習内容	学習者の自己課題	通信による支援内容
第1週	帰宅時間:子どもの帰宅時間、帰宅が遅い場合の理由等について話す	<ul style="list-style-type: none"> テープ聞き取り 語彙表現の理解 文法表現の確認と整理 文型表現練習 会話練習 	教材 郵送 第1回スクーリング <ul style="list-style-type: none"> 学習者データ確認 日本語での会話練習 テキストの説明 学習相談(4か月の学習ペースの決定) 課題 郵送 課題 のFB 郵送
	自宅学習:自宅学習の様子について話す		
	第5週		
まとめ		課題・会話録音と聞き取り	
第6週	習い事:習い事について話したり質問したりする	<ul style="list-style-type: none"> テープ聞き取り 語彙表現の理解 文法表現の確認と整理 文型表現練習 会話練習 	教材 郵送 電話 <ul style="list-style-type: none"> 学習の様子を聞く 質問受け アドバイス 会話練習 課題 郵送
	塾:塾や日本語教室についての質問に答える		
第10週	食事:給食や家での食事についての質問に答える	<ul style="list-style-type: none"> テープ聞き取り 語彙表現の理解 文法表現の確認と整理 文型表現練習 会話練習 	課題 郵送 第2回スクーリング 課題 のFB 郵送
	まとめ		
第11週	親子関係:家での様子についての質問に答える	<ul style="list-style-type: none"> テープ聞き取り 語彙表現の理解 文法表現の確認と整理 文型表現練習 会話練習 	教材 郵送 電話 <ul style="list-style-type: none"> 学習の様子を聞く 質問受け アドバイス 会話練習 課題 送付 課題 のFB 郵送
	兄弟関係:兄弟についての質問に答える		
第15週	お小遣いとお手伝い:小遣いや手伝いについての質問に答える	<ul style="list-style-type: none"> テープ聞き取り 語彙表現の理解 文法表現の確認と整理 文型表現練習 会話練習 	第3回スクーリング
	まとめ		

留意点

- ・体調への配慮が必要であり、状況によっては学習を中断せざるを得ないということ念頭に支援を行う。
- ・コミュニケーションの力がかなり高い学習者であり、学習成果が見えにくい可能性がある。そこで、何を学んだのか、どのような力が身についたのかを感じられるように、それぞれの学習活動や練習を行う目的を具体的に示し、意識化させて学習意欲を維持させる支援が必要であろう。

4-4. 通信による学習の経過と状況

実際に行った通信学習についてその経過と状況を紹介します。ここでは前節の支援の内容にそって、支援者が見た学習状況およびそれがわかるエピソードや学習者本人の発言を記録した(エピソードと学習者本人の発言は枠内)。

第1回スクーリング：日本語がわからないため娘の学校生活に不安を抱いていた。

娘の遠足のお知らせを見たけどわからなくてお弁当やお菓子を持たせてやらなかった。娘にかわいそうなことをした。娘は友達や先生からお弁当やお菓子を分けてもらって食べたと聞いた。このことも、娘が遠足の写真をもらってきて、それを見てやっとわかった。

課題 郵送：漢字の読み方について本人から質問あり。

課題の結果：全体的によくできていたが、文法的な誤りがいくつか(授受表現、動詞のた形、受身表現)あった。そこで学習者から送られてきた課題のテープの文字起こしを行い、間違いの箇所を指摘し適切な表現を紹介するとともに、適切な答え方録音したテープを返送した。

電話：電話体調が優れず学習が進んでいない。

つわりがひどくてここ2日程大変だった。勉強できなかった。第2冊のテキストもあまり勉強していない。

課題を単にこなすだけでなく、日本語の学習にプラスになるようにやり方を工夫して行っていた。

練習1は、まず1回目は聞く、2回目に書き取る、3回目に聞き取ったものを直す、4回目に確認のために聞く。そして自分の答えを下書きしてから録

音する。その後、全体をもう一度聞いて確認する。練習2は3回聞いて、答えを書いて、そのあとも3回ぐらい聞く。わからない所を4、5回繰り返し聞いた。先生からのFBを見て、復習用のテープを3回聞いた。受身は初めてだった。

第2回スクーリング：生活上変化があり、学習にも大きな影響出ている。

- ・出産予定が5月、今3ヶ月半。つわりが続いていながらも食べられず体調が悪い。
- ・10月20日から仕事を始めた。
- ・勉強できるのは日曜だけになった。普段は寝る前に横になって聞いているが、いつも途中で寝てしまう。
- ・課題はまだやっていない。

「自分の生活リズムに合わせて、無理をせずできる範囲で勉強しましょう」とアドバイスする。

電話：教材の課題の進み具合及び学習状況について尋ねるが、最近就労したため仕事で時間が無く進んでいなかった。

体調は少し良くなった。でも、仕事が忙しくて勉強できない。前のように時間をとって勉強することができなくなった。

電話：会話練習をする予定で電話をしたが、家事等で忙しく会話練習するゆとりはない状況であった。(電話をかけた時間が夕食後で、やっと一息ついたところだったらしく日本語の勉強をする気分ではなかったのであろう。)

仕事が前より忙しくなった。体調は相変わらず。日本語はこの次練習しましょう。

電話：電話練習をする予定(手紙で予告済み)で電話をしたが、やはり気持ちの上で練習する準備ができていないようであった。

土日忙しいです。練習は今日はちょっと...。23日(スクーリング3回目の時)に練習しましょう。23日は娘も連れて行きます。

仕事を始めて、日本語学習の優先順位が下がったようだ。無理をしてまでも日本語を学習するという考え方ではないのだろう。しかし、置かれている状況をうまく利用した学習は自然にできている。(この電話でのやりとりを通して「上履き」という日本語を知る)

第3回スクーリング：日本語学習の意味を自分の生活の中にはっきり位置づけているため、生活の変化に合わせて学習のやり方を変えられる。今回の状況では、無理して根を詰めて続けようとは考えていない。それによって、精神的に安定した状態で学習を継続できたのであろう。

寝る前に見て勉強しているが、眠くなって我慢できなくなったら止めている。聞くのも同じです。仕事から帰ってご飯食べたならもう何もしたくなくなる。でも、一応寝る前に布団に入って聞くようにしている。だから、長い時間は無理。

娘の学校での様子や、学校からの通知表の見方がわからなかった。彼女は母親として情けないと感じ、もう少し日本語がわかればなあと思っているようであった。

通知表の内容がわかってよかった。学校で衛生係をしているのも知らなかった。学校での娘の様子で初めてわかったことが多い。それに、娘がこんなに日本語を話すのを初めて聞いた。びっくりした。

この通信学習について、学習者はペース・量・内容共に合っていたし、自分の日本語の力も伸びたと評価している。

- ・気楽にできた。もしこれより難しかったら、かなり苦労したと思う。今の状況（フルタイムで仕事・妊娠）ではこの程度の難易度でちょうどよかった。
- ・このテキストの内容（特に前は知らなかった「塾」や「習い事」等）に関しては聞く力が伸びたと思う。テキストの内容がとても役に立った。

効率良く日本語学習を進めるには質問できる支援者の存在が必要だと考えている。

わからない時に、いつでも質問できるようだと勉強しやすい。

4-5. 考察

本プログラムで実施した通信学習について、プログラム及び教材『話してみよう、子どものことを』の学習者ニーズへの適合性、学習者の自学自習の状況、学習効果の3点から考察を行う。

プログラム及び教材の学習者ニーズへの適合性

学習者は娘（小学1年）の教育について大変関心が高く、学校からの「お知らせ」等が理解できないせいで娘が学校行事や学校生活で困ることがあるのではないかと心配していた。また、学校の保護者懇談会等では日本語でどう表現してよいか分からず発言することができないと言っており、子どものことについて会話する力を身につけることの重要性を意識していた。その点で、子どもたちの生活をトピックとして取り上げ、会話力を身につけることを目的に作成された本教材は、内容及び目標とするスキルにおいて学習者のニーズに合っていたと言える。

本教材は3分冊からなり、各分冊とも3～4つのトピックから成り、各トピックが2～3つの会話とその練習によって構成されている。各分冊を1ヶ月という期間で学習し課題（ヒアリングと会話録音）を提出するというペースは、仕事を始める前までは十分にゆとりを持って行える量であり進度であった。但し、後半学習者が仕事を始めてからは同じ学習方法では継続できず、テープを聞くことを中心にした（家事をしながら聞く、寝る前に聞く等の）学習方法に変更することで学習を継続することが可能となった。しかし、課題の提出は時間的に負担が大き過ぎたようである。特に、会話録音は学習者にとっては録音前に十分な準備が必要であり、時間の無い学習者への課題として不適切であるということが分かった。

学習者の自学自習の状況

前半と後半で学習者の生活状況が大きく変化したために、初期のプログラムを4ヶ月間通して実施することはできなかった。

前半は、教材を利用していろいろな方法で学習を進めていた。テープを繰り返し聞き、聞き取れなかったところはテキストで確認し、その語彙を書いて覚えたり、課題である会話録音の時に新しく覚えた表現方法を使ったりしていた。また、内容的には簡単に理解できる会話であってもそこから何かを学ぼうという姿勢があった。例えば、より適切な言葉で文法的にも正しくに話せるようになるためにモデルの会話を繰り返し練習したり、知っている言葉でも自分が知らない使い方があることに気づき、その用法で使ってみたりしていた。目標とする日本語能力を身につけるためには、今どんな力を伸ばさなければならないのかということをかかなりの確に把握していると思われた（ただし、意識的には

なかった)。そのため、支援内容は、より適切な表現や文法上の誤りを指摘するなどの言語運用面でのF Bと、学習状況について話を聞いて学習方法や学習のペースをより意識化させるということが主であった。しかし、教材の活用の他に、漢字辞書の利用や近くの日本人と接触してみる等を今の学習に連動させて行うという学習方法を試みておらず、提供された教材以外に学習の場やリソースを探るといふことの有用性については意識化させる必要があった。

後半は仕事を始めたために日本語学習の時間があまりとれなくなり、テープを聞き流すという方法での学習に変わった。学習者は自身の生活全体にとって日本語学習がどういう意味を持つのかという位置付けがはっきりできており、仕事を始めたことで相対的に日本語学習の優先順位が下がり、それに割く時間、エネルギーも減ったということである。それでも、少ない負担で続けられる方法に切り替えて学習を継続できたという点で、自己管理学習ができていたと言える。

一方で、彼女が言っているように、支援者からの定期的な働きかけが継続を支える一因となっていたという点も注目したい点である。学習者が役に立ったと感じていた支援は、自分では気づかない運用上の誤りへの指摘やより適切な表現の例示、電話による学習相談や課題の進行状況についての問いかけであった。学習者はある程度自分で学習を管理して進めるためのスキルを持ち合わせていたが、学習の成果にたいするフィードバック、またペース保持のための催促等の働きかけ、学習状況についてのカウンセリング(このケースでは特に学習方法の変更を受容し励ます対応)が学習への意欲の維持と学習の継続には必要な要素だったと言える。

学習者自身が成果があったと感じているのは、次の3点であった。第一にヒアリングの力が伸びた、第二に前よりも正確に言葉を使って話せるようになっており、第三に日本の子どもに関連するいろいろな事情がわかった。ヒアリング力の伸びについては、学校の先生と電話で話した時や学芸会に出かけていった時に感じたそうである。会話の力については、負のフィードバックがあった点について常に意識して話すようになったし、テキストの会話で覚えた表現を使うようにしていると述べている。そして、学習者が最も高い評価をしたのは日本事情についての知識が増えたという点である。たとえば、日本の「塾や習い

事」について、時々耳にはしていたがはっきりと知らなかったし、日本の子どもたちの一般的な状況がテキスト会話から分かったと述べている。それによって、会話がスムーズに理解できるようになったり、自分でも話せるようになったと言っており、話題についての知識が理解を助け、やりとりを円滑にすることについても気づいているようである。

日本で生活をしている帰国者を対象とする教材の場合、社会と学習者を繋ぐトピック、つまり生活に密着した内容を盛り込むことが学習の動機付けになるとともに、実際の日本語使用の場面で背景知識として理解や発話の助けとなると考えられる。

本ケースの通信学習支援は当初のプログラムを遂行できなかったものの、学習者の満足度や自分の日本語力の意識化の点からは効果があったと考える。今回、支援の下ではあったが学習を継続できたという経験が、学習者が今後日本語学習を再開する上で自信とゆとりとなって後押しするものと期待している。

5. 事例報告 - ケース の場合

学習者	学習目標	使用教材名	支援担当者
50代 / 男性	会話力の伸張	日本の生活とことば「病院」・「面接」(改訂版)	所沢セクター講師

5-1. 学習者データ

属性：孤児二世配偶者 日本滞在年数：約3年 職業：無

日本語学習歴：福島センター8ヶ月コース修了、その後同センター再研修講座の8ヶ月コース修了

日本語レベル：

福島センター講師による評価(資料1「学前アンケート」中の「日本語を使っていること15項目」からの選択)

- ・平仮名片仮名の読み書き
- ・聞き取った単語の表記(多少不正確か)
- ・商店で値段を尋ねたり、品物を買ったりする
- ・年齢や出身地について質問に答える

コース担当者評価：「初級下」程度（第1回目の電話でのペアワーク時にチェック）

家族、出身地、仕事など自己紹介的話題なら、キーワードや講師の言い換えなどを頼りに意味を理解して何とか（主に単語レベル）答えられる。

学習条件：

- ・希望学習時間...週5日各2～3時間程度
- ・保有学習関連道具...電話、テープレコーダー、テレビ・ビデオ、日中辞典中日辞典（但し本人の弁では「辞書引きは不慣れ」）

備考：

- ・外国語学習歴なし
- ・30代の時、中国で通信教育を利用して漢方医資格を取得した。
- ・支援リソースとして、福島センター講師の他、家族の中に日常会話で不自由しない程度の会話力を備えた者(子弟)がいる。

初回スクーリング時の面接所見：当時、学習者は心理的に苦しい状況にあったのではないかと思われた。帰国後3年近くなっていたが、繰り返される求職活動も就労には結びつかず、自宅に閉じこもりがちで、日本社会との接触は、病院利用など限られた場面のようなようだった。「（職安で）掃除の仕事さえ、『あなたの日本語力では無理ですよ』と言われたんですよ」と吐き捨てるように言ったのが印象的だった。会話力を測るために、自己紹介的な話題でやりとりしたいと考えたが、福島センター講師からは「福島センターでの研修時と比較しても、日本語力が後退しているようだ。日本語を使うと萎縮するのではないか」との助言を受け、中国語で面談した。やりとりの中で、学習者は進んで日本語の短い単語をいくつかはさんだが、あきらかに生活の中から拾ったと思われる語彙であった。限定的ではあっても実生活の中で日本語のシャワーを浴びてきたことにより、日本語を聞くことに対しては準備ができていたようであった。教材『病気』を開くと、ゆっくりと平仮名を音読し始めた。比較的聞き取りやすい発音で、これまで、テキストを音読して覚えるスタイルを好んだようだ。現在も自宅では手持ちの教材を読み返すなどして、日本語への関心を持ち続けているようだった。こちらが提案したテープ学習に対しても意欲的であった。

5-2. 本コースの目標

学習者データを基に検討した結果、本ケースでは、次のような支援目標を設定した。

基本的日本語力および基本的学習技能の伸張を支援する。

福島センターの「サロンコース」（後述）と連携することにより、学習環境の改善や人的リソースの広がりを展望に入れながら、学習およびコミュニケーションに対する自信と意欲を身につけられるよう支援する。

学習者は本コースへの参加と同時に、福島センター再研修講座で試行される「サロンコース」への参加が決まっていた。サロンコースは社会的に閉ざされがちな中高年の帰国者を対象に、帰国者同士あるいは帰国者と地域の支援者との人間関係づくりの場や自己表現の機会を提供するものである。（本紀要 馬場参照）

5-3. プログラム設計

本ケースでは、コースを前期後期に分け「病気」プログラムと「面接」プログラムを設計した。

(1) 「病気」プログラム

学習目標：病院利用についての基本的知識や日本語を学んで、自分や家族を伴ったの病院利用ができる。

教材：『日本の生活とことば - 病気 - 改訂版』テキストと音声テープ

上記テキストは所沢センター開発の既存教材をベースに自己課題として「聴解問題（模範解答付）」を加えたものである。テープは「スキットや重要表現」部分を数回ずつ繰り返し編集し録音した。

語彙文型レベル：初級中～上

学習方法：以下の をベースに、 を併用する。

教材を使った自学自習

通信によるペアワーク

- ・ペース：原則は2週に1回
- ・方法：講師と電話で会話練習（約20分）
- ・留意点：ペアワークでは、練習の流れについて指示を与える時以外、講師は極力日本語のみを使用する。その場ではフィードバックせず、後日手紙でコメントする（中国語使用）。日常生活で日本語を使用する機会の乏しい学習

者であるため、教材に関わる練習以外に自己紹介的な話題や家族の近況について自由な会話を挿入する。

- ・フィードバック：電話中の内容を録音し、そのテープと共に講師のコメントを付けて返送する。

評価：学習者の自己評価およびコース評価は、アンケートおよび学習相談を通して行う。教師による学習者評価は、練習の結果、学習継続の状況、学習者へのインタビュー結果、スクーリング時の観察結果等を基に行う。評価の観点は、語彙・表現の運用面、学習の継続状況の他、コミュニケーションに対する態度面の变化を重視する。

備考：テキストは、スタート時に渡す。テープは進度に応じて適宜渡す。必要があれば電話で学習相談に応じる体制をとる他、質問表の郵送も受け付ける。

次の学習計画表は、学習者と相談の上支援者側がリードして設計した。

時期	学習内容	自己課題	通信によるペアワーク
第1週	受付で ・モデル会話の練習 ・身体部位覚える ・体温計の読み方	・テープの聞き取り ・音読練習 身体部位語彙テスト ・読みとり練習	電話 ・各課のモデル会話の練習 ・ロールプレイ（学習者の選択で）
	・初心者カードの記入 ・ロールプレイ	・記入練習 聴解問題 （身体部位）	
第2週	症状を説明する ・モデル会話の練習 ・症状の言い方 ・ロールプレイ	・テープの聞き取り ・音読練習 聴解問題（症状）	
	持病・既往症・アレルギー ・モデル会話の練習 ・アレルギーの言い方 ・既往症の言い方 ・医師の質問の聞き取り ・ロールプレイ	・テープの聞き取り ミニ聴解問題（持病）	電話 ・各課のモデル会話の練習 ・ロールプレイ（学習者の選択で）
第3週	診察を受ける ・モデル会話の練習 ・医者への指示の聞き取り	・テープの聞き取り ・音読練習 聴解問題（指示受け）	
	診断・注意を聞く ・モデル会話の練習 ・医者への処方、指示を聞き取る	・テープの聞き取り ・音読練習 聴解問題（注意）	電話 ・各課のモデル会話の練習 ・ロールプレイ（学習者の選択で）

第6週	薬をもらう ・モデル会話の練習 ・薬袋の読み取り	・テープの聞き取り ・音読練習 聴解問題 聴解問題	
	薬屋 ・常備薬の名前 ・モデル会話の練習 ・薬の説明の読み取り ・ロールプレイ	・テープの聞き取り ・音読練習	
第7週	家族の急病 ・モデル会話の練習 ・親族呼称 ・急病の言い方 ・ロールプレイ	・テープの聞き取り ・音読練習	電話 実現形では講師の都合でスクーリング時に実施 ・各課のモデル会話の練習 ・ロールプレイ（学習者の選択で）
	休日の病院利用 （緊急の病気） ・モデル会話の練習 ・自分の住所 ・自宅の位置 ・ロールプレイ	・テープの聞き取り ・音読練習 ・自分の住所と位置の言い方を考える	
第8週	歯医者への予約 ・モデル会話の練習	・テープの聞き取り ・音読練習	

上記表中 印は模範解答付き

(2)「面接」プログラム

学習目標：初対面の人の前で簡単な自己紹介ができ、自分や家族についての自己紹介的な話題をめぐって、周囲の人と会話できる。

教材：『日本の生活とことば - 面接 - 改訂版』テキストおよびテープ。

上記テキストの自学自習用改訂のポイントは、「病気」に同じ。

学習方法、留意点、評価、備考はいずれも「病気」プログラムに同じ。

学習計画表

時期	学習内容	自己課題	通信によるペアワーク
第1週	自己紹介 ・自己紹介基本語彙 ・基本的な質問と答え方	・テープ聞き取り 聴解問題	電話 ・質問の聞き取りチェック ・自己紹介項目の会話練習 第1回スクーリング
第2週	自分のこと ・自分の個人データ整理（年齢、生年月日、出身地等）	・記入(穴埋め)	・記入課題の内容チェック
	自分のことを書いてみよう ・自己紹介作文（穴埋め形式）	・記入(穴埋め)	

第3週	面接を受ける...(!)入室(2)面接 ・モデル会話の練習 ・項目面接練習(聞き返しのストラテジー練習を含む)	・テープ聞き取り	電話 ・モデル会話の会話練習 ・項目面接会話練習 ・質問の聞き取りチェック
第4週	「いろいろな質問」 ・名前について ・国籍について ・年齢について ・来日について ・故郷について ・家族について	・テープ聞き取り	
第5週	・日本語について ・仕事について ・趣味について ・日本の生活について	・テープ聞き取り	電話 ・質問の聞き取りチェック ・会話練習 ・答え方について質問受け
第6週	いろいろな表現 ・名前の言い方について ・年齢の言い方について ・故郷について ・家族について ・仕事について ・趣味について ・日本の食べ物について ・質問の有無をたずねる	・テープ聞き取り	第2回スクーリング ・総復習

5-4. 経過

電話でのペアワークを1回、講師側の事情で日程変更した他、ほぼ計画通りに進行した。最初1、2回のペアワークでは、学習者は教材に適した自学自習方法がまだつかめていない様子であったため、フィードバックの内容は、テープを使った自学自習の方法や応用問題(ロールプレイ)のやり方についての説明、ペアワークを記録したテープを聞きながら復習する方法などを中心に行った(資料2)。3回以降は学習の方法にも徐々に慣れ、フィードバックは主に誤用の訂正と新出表現の提示を行った。誤用の訂正については、本ケースでは学習者が間違いを恐れず話すようになることが重要という視点から、基本的に大意が通じれば一応の評価をし、その上で、適切な表現を紹介した。以前指摘された誤用が次の機会には改められていることが度々あった点、2回以降中国語をほとんど差し挟まなくなって、単語レベルでも何とか伝えようとする態度が強まった点から、自学自習は順調に進んでいると判断した。

生活状況の変化としては、10月に入って夫人が病気で入院し見舞いに通っている他、福島センター再研修講座の「サロンコース」への参加もあって外出機会が増え、以前の閉塞感は薄れてきているようだった。

次に学習者の自己評価をアンケートの記述(枠内)とスクーリング時の発言(「」内)に分けて述べる。

教材について

自分で前もって、どのように病院に行って、診察を受けるかが書かれた教材を使って学習でき、さらに先生からも指導を受けられるから深く体得できる。病状を簡単に医師に説明でき、一般的な服薬の方法や注意事項も大体聞いてわかるようになった。日常生活会話方面で、このような簡単に適当な教材を作って欲しい。私たちが1日も早く日本語をマスターできるように支援して欲しい。

「この教材は系統だって学べるのがいい。いままでの教材と違う。」

学習のやり方について

・自学自習用教材を用いた学習は大変よい。会話練習の時間も比較的多いいろいろな面で細やかな支援も受けられる。自分では進歩が速いと感じる。
・1日2時間学習する。まず机の前に座って、テキストを見ながらテープを聞く。何回か聞くと、今度はテキストを見ないで聞き取りの練習をし、重要な単語を暗唱する。
・以前の日本語学習では、単語を覚えても日本人と会話する段になると言えず後になってやっと思い出せた。通信学習は先生と電話で会話練習できるのがいい。

講師の支援の必要度について(5者択一のところ2つ選択)

・非常に必要 ・どっちにしろ支援があったほうがいい。

学習の進捗について(4者択一のところ2つ選択)

・丁度いい ・どちらとも言えない

「週によって、もっとできると思う時もあるし、忙しくて大変と感じる時もある。できるだけ計画通りにやるようにした。」

学習の成果について

簡単な日本語を使って、日本の友人に電話することができるようになった。

「例えば？」の問いに、「娘に代わって学校（夜間高校）の先生に連絡する。先生（セク講師）と電話で話すときの様子を思い出して『 』です。お元気ですか』とか『 』ですね』などと話す。」

誤用の訂正について（5者択一のところ3つ選択）

- ・指摘された点については、正しい日本語が身についた。
- ・まだ、ときどき間違えるが、正しく言おうと気をつけるようになった。
- ・間違った使い方を直すのは難しい。だが徐々に身につけていけると思う。

日本語ではうまく話せない。もしも今後仕事に就いたら、上司や同僚と話して言い間違えると、誤解をうんだり、笑われたりするかもしれない。先生から支援を受けることが大変重要だし、いいと思う。

学習上の困難について（2者択一）

- ・困難あり。
- 以下の具体例選択肢すべてに
- ・学習のペースについて、生活が忙しくなった時など予定のペースでは大変な時がある。
 - ・教材の日本語レベルが全体的に難しい。
 - ・日本語でわからないことがあった時、身近に質問できる人（家族、隣人などの日本人）がいない。または質問できる人はいるが、実際には質問しづらい。
 - ・先生に質問したいことがあっても、通信による練習時以外はなかなか手紙や電話を使って聞けない。

「聴解問題の中の 番は、会話が速く、何度も聞いたが、それでも大変だった。」

「(身近な支援者について)娘は日本語ができるが、私が学習している時には、いないし、娘は忙しい。」

リソースの活用状況について（選択肢すべてに）

- ・テレビを見る よく見る番組は（具体的に：ニュース、ドラマ）
- ・家の外で、機会を見つけて周囲の日本人と話す（具体例は挙げず）
- ・日本語が上手な家族や身近な人に質問する（具体例は挙げず）
- ・役に立つ言葉をメモして、覚える練習をする
- ・わからない言葉があれば、辞書を引いて調べる

日漢辞典利用についての問いに対し「ほとんど引かない」ということだったので『日漢辞典の引き方 中国語資料』の送付を提案したところ希望した。中間時スクーリング以降は、「面接」プログラムを実施した。最終回の電話練習が学習者、支援者双方の事情で延び、最後のスクーリング時に持ち越された以外は、学習は計画通りに進んだ。ペアワークでは会話練習の他、語彙・表現の定着度チェックを行った。フィードバックでは、新出表現の提示の際に適宜初級文法項目を解説するなどやや手数をかけた。別途文法教材を提供することも考えたが、外国語学習経験のない学習者の場合、自学自習用として使いこなせない懸念があり、あえて提供しなかった。なお文章による文法解説は、分析的になることを避け、例文を多くすることによって用法の理解を助けるよう努めた。

生活上の変化としては、夫人は退院後も定期的に通院せねばならず、学習者が手続きや通訳を兼ねて付き添っているとのことであった。月1回程度の「サロンコース」へも積極的に参加し、新たに知り合った人の前で特技の披露等自己を表現する機会を得ていた。一方就労のための職安通いも続いていた。

修了時のスクーリングでは「面接」プログラムおよび「コース全体を通じての評価」を主にインタビューで行った。スケジュールの変更で時間不足となったのが残念であったが、以下に述べる。

「面接」プログラムについては、「『面接』の内容の中には前に学習したこともあった。でも、文を覚えて言えるようになるのは、少し大変だった。聴解問題は全体的に難しくなかった。(それから「あの病気の教材は、本当に良かった。」と付け加えた)。「会話の力をつけるには、先生との電話での練習が大事。また先生からのコメントを見ながらテープ（会話練習の記録）で復習できることが役立った。できれば練習時間を20分から30分にして、残り10分は他の教材の練習もしてほしい。」との要望もあった。

コース全体を通じての評価は次の通りである。（枠内はアンケート回答、「」内は発言）

達成度

伸びた。(5段階評価選択肢の最上級)

「(どんな点が伸びたかの質問に対し) 妻の通院に付き添う時、診察室にも入る。
『身体がだるいんです。』等テキストにあった言葉をそのまま使って通訳のよ
うなことをする。」

自身の変化

少し変化した。(5段階評価の上から2番目)
(以下具体例選択肢)
・日本事情について知識が増えた。
・これからも学習を続けていこうという積極性や自信が強まった。
・外に出た時、日本語を聞く、話す点で以前より積極的になった。

今後の学習について

いろいろな方法を使って虚心に日本語を学ぶ。日本の友人に尋ねるように努め、
時間があれば周囲の日本人とも話す。一生懸命がんばって、実際の(会話)場
面に足を踏み入れ、はやく日本語をマスターしたい。

(5者択一で2つ選択)
・適当な教材があって、忙しければ通信コースに参加したい。
・通信教育以外の方法(教室授業形式・家庭教師の内前者に)があれば、そ
の方法で学びたい。

「次は「仕事」関係の教材で学びたい。」

インタビュー回答とアンケート回答のずれを尋ねたところ、選択肢の読み取
りに誤解があり「通信教育以外の方法で学ぶとしたら、教室での授業と家庭
教師では前者を選ぶ」という意味であった。

5-5. 考察

学習者の自己評価を基に、担当講師による観察結果等も加えながら、学習効
果、学習者のニーズ・レベルと教材の適合性、通信による支援の妥当性の3
点から考察を加える。

学習効果

修了時の自己評価では伸びについて5段階評価で最高の「伸びた」を選択した。
ペアワークおよびスクーリング時のレベルチェックでは、課題は60~70パー

セント達成できた。学習項目は限られており、全体の会話力から見れば大きい
変化は認められないが、日本語に対する態度面の変化は明らかであると思う。
修了時スクーリングの後行われた座談会で、日本人ゲストや日本語力の高い帰
国者の発言について、耳を傾け、時々聞き取った日本語や(そこから類推した
内容を)講師に確認する等コミュニケーションへの積極性が認められた。また
こちらが希望を聞く前に、学習者の方から「次は仕事の教材で勉強したい」「電
話での練習がためになるので、時間を20分から30分に延長してほしい。」と
述べる等、今後の学習目標や学習方法への意見を述べたことは、学習への積極
性として評価できると思う。従って支援目標の については、短期間のため成
果は十分ではないが、 においては目標を達成できたと考える。

教材の適合性

学習者の評価では「病気」教材への評価が高かった。学んだことを実際に病院
で使用し通じたという効力感、そのことによって学習に満足し、次の学習への
意欲に繋がるというプラスの流れがあったのではないかと。「面接」教材への評
価は、今ひとつであった。最後に学習者が「次は仕事の教材がいい」と述べた
ときに、一般的な面接項目よりも、就労に結びつく事柄を学びたかったことが
察せられた。生活課題に直結した教材へのニーズが高いことの示唆であろう。
一方難度について、学習者は『病気』教材は(内容が)系統だっていて、学習
しやすかった」と述べる一方、全体として「難しかった」と答えている。本教
材は教室活動用に編まれたものを自学自習用として改訂したが、初級下レベル
の学習者にとっては、例えば、文型の解説や、スモールステップによる練習と
いう細かな段取りが不足しており、学習者が中国語訳だけを頼りに、理解し習
得するには負担があったと思われる。「面接」についても同様である。学習者
がことに「病気」教材について、動機付けが高く、また50代にも関わらず、
記憶することに対してスキルと集中力があり、その時間的余裕もあったことに
助けられた感がある。

通信による支援の妥当性

初級下レベルの学習者には、電話での会話練習はかなりの緊張を伴うが、本ケ
ースでは、当初練習の指示などは中国語を使用したという点、いざという時は
中国語で質問できるという点で、学習者に大きな抵抗はなかった。学習者には

貴重な練習時間と認識されていたが、本ケースのように在宅時間が比較的長く、電話練習の時間がとりやすい学習者にとっては簡便な練習方法であったと思われる。

また記録テープによるフィードバックについては、練習とフィードバックの時間差を解消する手段として、また自分の会話をモニターすることで、語彙・表現の定着強化の助けになったという点で一定の効果があったと思う。

6. 事例報告

学習者	学習目標	教材名	支援担当者
40代/男性	会話能力の伸張	こんなとき会話「バス道聞き」「買い物」「職場」	サポーター・福島センター講師

6-1. 学習者データ

属性：帰国者二世 日本滞在年数：約4年 職業：有

日本語学習歴：・福島センターの8ヶ月コースを4ヶ月受講、その後同センター再研修日本語コース（平成9年9月から平成10年1月まで）を8回程度受講

日本語レベル：

学習者による自己評価（資料1「学前アンケート」中の「日本語を使ってできること15項目」からの選択）

- ・平仮名片仮名の読み書き
- ・聞き取った単語の表記（多少不正確か）
- ・商店で値段を尋ねたり、品物を買ったりする
- ・年齢や出身地について質問に答える

学習条件：

- ・希望する学習時間...週7日各1時間程度
- ・保有する学習関連道具...電話、テープレコーダー、テレビ、ビデオ、日中辞典、中日辞典。

生活状況及び日本語使用状況：平成11年9月に転職したばかり。「以前の仕事は鉄工所、現在はカメラのレンズ組立なので、以前の仕事ほどは疲労しない」とは言うものの、勤務時間は8:30~10:00で、休日は日曜日と第3土曜日だけという過酷な労働条件である。通勤時間は車で7分なので、昼は家に戻る。福島

センターまでは車で30分である。

仕事では、ほとんど日本語は使用しなくても済んでしまうが、以前機械が止まってしまった時に何と言っているのかわからなくて困った（鉄工所でのこと）と言っていた（第1回のスクーリング時での聞き取り）。子弟（高校生）が日本語で通訳可能である。

担当者（福島センター講師）所見：第1回スクーリングで学習者と話して印象に残ったのは、日本人や日本社会との関わりの希薄さだった。日常のほとんどの時間を会社で過ごす、日本語を話すことが求められることは少ない。再研修当時より聴解力においては伸びがみられるものの、日本語使用に関してはまだまだ困難さが感じられたのはそのためだろう。

6-2. 本コースの目標

本コースの支援目標は次の通りである。

電話でのサポーターとの会話練習を通して、まず日本語を話すことに慣れる。学習者が必要性を感じている話題についての教材を提供することで、すぐ使える表現を増やす。

この支援においては、とにかく日本語を使ってみよう、自分の日本語に自信を持ってもらおうと考えた。そこで学習者と年齢や家族構成などの近いIさん（男性、40代、既婚子供一人）にサポーターとして関わってもらうことにし、筆者自身はコーディネーターとして、教材の配布やスクーリングでの関わり程度にとどめることにした。この学習者は再研修に来られなくなっても、お知らせを出せば交流会（3ヶ月に一度）には必ず参加して日本人と積極的に交流しており、今回のサポーターIさんにも交流会で何度か会って話をしている。Iさんにはどちらかということ、日本語学習の支援者というより、会話の練習やわからないことがあった時などに気軽に電話で聞ける友人的な関わり方を期待した。

6-3. プログラム設計

(1) 前期プログラム

学習目標： 周囲の人に尋ねながら、はじめてのバスを利用して目的地に行ける。見知らぬ土地で、道を探ねたり、事前に行き方を聞いたりして目的

地に行ける。

教材：『こんなとき会話 バス・道聞き編 』テキスト（資料3）および音声テープ

語彙・文型レベル：特定できないが、初級中～上が中心

学習方法：以下の をベースに、 を併用する。

教材を使った自学自習

通信によるペアワーク

- ・ペース：ほぼ1週に1回（日曜PM8時頃）
- ・方法：サポーターと電話で会話練習（20分～30分程度）スクーリング

備考：

支援上の留意点として、忙しい生活の中でも時間を作り自学自習を進める学習者が、日本語学習に負担を感じないように配慮する。

スクーリング時の学習相談では、中国語使用講師がサポートする。

（必要があれば）学習者はファクシミリ（貸与）、電話等で質問や相談ができる。

学習計画表は次の通りである。通信による会話練習の内容は、モデル会話のやりとり練習の他、適宜日常的な話題を盛り込むこととした。

時期	学習内容	自己課題	通信によるペアワーク
第1週	バス停を聞く： バス停の場所について、見知らぬ人に尋ねる。	聞き取り 発話練習	会話練習
	乗るバスを聞く： バス停で、見知らぬ人に目的地を言って、乗るバスを尋ねる。	聞き取り 発話練習	会話練習
	乗るバスを聞く： バス停で、見知らぬ人に、近づいて来たバスが目的地へ行くかどうかを尋ねる	聞き取り 発話練習	会話練習
第2週	整理券： バスを降りる時、整理券を取り忘れたことを運転手に断る。	聞き取り 発話練習	会話練習
	両替： 料金を払う時、5000 札の両替が可能かを運転手に尋ねる。	聞き取り 発話練習	会話練習

	車中で降りるバス停を聞く： 車中で、見知らぬ人に目的地はいくつ目かを尋ねる。	聞き取り 発話練習	会話練習
第3週	忘れ物： バスの中に忘れ物をした時、電話で営業所に連絡する。	聞き取り 発話練習	会話練習
	地図で道を聞く： 見知らぬ土地で、事前に準備した「地図」を示して、道を尋ねる。	聞き取り 発話練習	会話練習
第4週	メモで道を聞く： 見知らぬ土地で、事前に準備した「場所名のメモ」を示して、道を尋ねる。	聞き取り 発話練習	会話練習
	事前に行き方を尋ねる： 事前に、身近な人に目的地への行き方を尋ねる	聞き取り 発話練習	会話練習
第5週	まとめ		会話練習

(2) 中期プログラム

学習目標： 商店利用に関する知識を増やす

商店利用で生じる様々な困難を解決しながら、行動達成できる

教材：『こんなとき会話 買い物編 』テキストおよび音声テープ

語彙・文型レベル：特定できないが初級中～上が中心

学習方法と備考：『こんなとき会話 バス・道聞き編 』に同じ

学習計画表

時期	学習内容	自己課題	通信によるペアワーク
第1週	売場 商品の売場を尋ねる	聞き取り 発話練習	会話練習
第2週	商品の有無： 商品名を述べて、その有無を尋ねる	聞き取り 発話練習	会話練習
第3週	商品を探す： 商品の特徴を述べて、その有無を尋ねる	聞き取り 発話練習	会話練習
第4週	値段： 商品の値段を尋ねて、買う	聞き取り 発話練習	会話練習
第5週	広告の商品： チラシを見せながら、商品の売場を尋ねる	聞き取り 発話練習	会話練習
第6週	サイズ： 自分のサイズを測ってもらう。	聞き取り 発話練習	会話練習
第7週	ズボンの裾詰め ズボンの裾詰めに依頼する	聞き取り 発話練習	会話練習
第8週	ズボンを買う： 大きさを述べて、衣類の有無を尋ねる	聞き取り 発話練習	会話練習

第9週	靴を買う： 色やサイズを述べて、靴の有無を尋ねる	聞き取り 発話練習	会話練習
第10週	試着： 試着できるかを尋ねる	聞き取り 発話練習	会話練習
第11週	洋服の交換： サイズを間違っ購入した衣類の交換を依頼する	聞き取り 発話練習	会話練習
第12週	野菜の交換： 瑕疵のある商品の交換を依頼する	聞き取り 発話練習	会話練習
第13週	おつりの間違い： 商店の人にお釣りが不足していることを伝える	聞き取り 発話練習	会話練習

(3)後期プログラム

学習目標： 日本の職場事情（職場のルールや習慣）について知識を増やす。
日本の職場事情に配慮しつつ、周囲の人とコミュニケーションをとりながら、具体的な課題を解決できる。

教材：『こんなとき会話 職場編』

語彙・表現レベル： 特定できないが、初級上が中心

学習方法と備考：『こんなとき会話 バス・道聞き編』と同じ

学習計画表：

時期	学習内容	自己課題	通信によるペアワーク
第1週	退社時のあいさつ： 上司・同僚に退社の挨拶をする	聞き取り 発話練習	会話練習
第2週	仕事を休んだ次の日： 仕事を代わってもらった礼を述べる	聞き取り 発話練習	会話練習
第3週	電話で欠勤届け： 電話で理由を述べて休みの許可をもらう	聞き取り 発話練習	会話練習
第4週	バスが遅れて遅刻： 電話で理由を述べて、遅刻を断る	聞き取り 発話練習	会話練習
第5週	歯痛で早退： 理由を述べて、早退の許可をもらう	聞き取り 発話練習	会話練習
第6週	仕事中に家族に事故の知らせ： 緊急事態に、早退の許可をもらう	聞き取り 発話練習	会話練習
第7週	休暇願い： 休暇を得るため、理由を述べて、上司に相談する	聞き取り 発話練習	会話練習
第8週	長期休暇願い： 長期休暇を得るため、理由を述べて、上司に相談する	聞き取り 発話練習	会話練習

第9週	歓迎会： 歓迎会に誘われた時、わからないことを尋ねた上で返事をする。	聞き取り 発話練習	会話練習
第10週	お酒に誘われたけれど： お酒に誘われた時、事情を述べて、別の日に約束する	聞き取り 発話練習	会話練習
第11週	宴会で先に帰る時： 宴会で、同僚に声をかけて先に帰る。	聞き取り 発話練習	会話練習
第12週	社員旅行に誘われる： 社員旅行に誘われた時、わからないことを尋ねた上で返事をする。	聞き取り 発話練習	会話練習
第13週	仕事のやり方がわからない： 仕事のやり方がわからない時、身近な人に尋ねる	聞き取り 発話練習	会話練習
第14週	残業を断る時： 残業を頼まれた時、事情を述べて断る	聞き取り 発話練習	会話練習
第15週	職場に来客 留守番をしている時、突然の来客に対応する	聞き取り 発話練習	会話練習
第16週	職場にかかってきた電話 留守番をしている時、外部からの電話に対応する	聞き取り 発話練習	会話練習

6-4.経過

前期プログラム（学習期間9/12~10/10）は、週1回の電話練習というペースで、ほぼ計画通りに進んだ。サポーターによれば「モデル会話に沿って会話練習することが中心で、発話は短い文なら問題ないが、長い文だとスムーズには言えないことがある。聞き取れない時はもう一度言ってもらおう。中国語の会話部分を教えていただいたりしたこともあった。」そうだ。時には、学習の様子や仕事のことについても話題がおよんでいる様子だった。「9月に転職した。」そうで、「『仕事どうですか?』と聞くと『忙しいです。朝8時から夜10時までです。』との答えを何度か聞いた」という。第2回スクーリング時も教材を使って、コーディネーターとサポーターで会話の練習を行った。サポーターは主に電話では日本語部分を役割を替えて練習していたが、コーディネーターが日本語スキット部分を隠して中国語スキット部分を見てもらって日本語を考えてもらう練習をするのを見て、「そういうやり方もあるんですね。」と話していた。サポーターの電話での会話練習のポイントは、日本人に通じるかどうか、スムーズに言えるかどうかということだった。あまり正確さは求めず、とにかく日本人に通じれば良いとし

ていたそうだ。第1回でのスクーリングでは「郵便局から中国へ送金する場合」について、第2回のスクーリングでは「銀行で口座を開く場合」について、それぞれ何と言えればいいのか質問があった。

中期プログラムの実施（学習期間10月11日～11月7日）では、転職（力仕事から軽作業へ）によって、勤務時間が長くなったためか、電話での練習はやらず、学習者は教材を使って自学自習を続けたようだ。「『この教材は使える表現が多い』と言っていた。」（サポーター談）そうだ。

第2回スクーリング（コース半ば）で紹介した教材「職場編」への関心が高かったので、「買い物編」の練習には入らず、そのまま後期プログラム（学習期間11月14日～12月28日）の学習に移った。電話練習は「第1週から第7週までに合わせて3回行い、モデル会話を役を替えて読むなどした。」「第8週以降もサポートすると申し出たのだが、『自分でする』と言って電話はかかってこなかった」そうだ。

コース修了時のサポーターによるコース評価は次の通りである。（枠内はアンケート回答、「」内は発言）

経過を振り返って

夜10時過ぎや朝8時に電話をくれたこともあった。私は構わないが、彼は忙しくて大変だなと思う。9月は、中国語を教えてもらったが、電話であまり長くなっても悪いかなどと思い、中国語で読んでいただくことも少なくなった。10月以後に数回「私のために、忙しいのに申し訳ない」と言っていた。もっと中国語を教えてもらって対等の立場で話せれば良かったと思う。（電話での練習は）彼にとって、日本語の勉強になったのだろうかという問いが残った。

「（学習者は）転職してから、仕事時間が長くなった上、土曜も出勤することがあるそうです。」

通信手段について

- ・電話のプラス面は忙しい人同士には時間の節約となるし、会話の声に集中できる。マイナス面は、会って話した方がもっと色々話せる。難しい質問ができない。（日本語が媒介語だが、筆談等の補助手段が使えないため）
- ・ファックシミリは、結局使用せずに終わってしまったが、日本語を中国語に訳したり、逆に「こんな日本語でOK?」というように、やりとりができれば良かった。

教材について

とっても良くできた教材で、テープも内容もとても良いと思う。もしかするとあるのかもしれないが、日本語だけの会話を1本にまとめたものがあると、何度も聞いて良いと思う。

次は、学習者による自己評価である。

自学教材を使った学習について（枠内はアンケート回答）

大変じゃない（5段階評価の4番目）

日本語力の伸びについて

少し伸び（5段階評価の2番目）

学習前と後の自分自身の変化について

- ・変化した（5段階評価の最上級）
（具体例選択肢の中から）
外で生の日本語を聞いたり使ったりする時、以前より積極的になった。

今後の学習について（「将来、通信コースの募集があったらどうするか」）

- （具体例選択肢の中から）
- ・適当な教材があって、しかも生活が忙しくなければ参加したい。
- ・適当な教材があれば教材だけほしい。
- ・その他（具体的記述）「適当な教材があれば自学する。わからないところがあれば先生や身近な日本人に尋ねる」

今後の学習については、時間がある時に自学自習を中心に学ぶのがいい。通信教材に書かれてあることはよくわかるし、他の人に迷惑をかけるのは申し訳ないから。個人の時間はとても忙しい。自分に時間があるとき、相手（支援者）も時間があるとは限らない。相手（支援者）が暇なとき、自分が暇とは限らないから。自分で学び続けるのが一番いいだろう。

6-5. 考察

このケースを 学習者タイプと教材との適合性、 学習効果の2点から考察する。

学習者タイプと教材との適合性

このケースの学習者は、前述のように労働時間が長くかなり多忙な生活を送っている。また仕事で日本語ができなくてもそれほど支障はないということで、当初この通信学習の話をした時にはさほど意欲的でなかったのも頷ける。この学習者のように日本語力は不十分であるが、時間がないということと（必要なときは子息など通訳可能な人がそばにいるため）生活上の必要性をあまり感じていない、つまり具体的な学習ニーズが明確ではないという人は多いのではないだろうか。このケースの学習者は中高年で、しかも外国語の学習が初めてであり、言語習得適性に関しては決して高いとは言えないが、学習者タイプ分類^{注6)}で言えばタイプ2[日常生活生活は問題ない。簡単な文法も身につけている]に入るケースと推測される。通信学習開始当初は、自学自習力の有無については把握できていなかったが、「テキストはまず1～2時間位で全体を通して見る。それから1課ずつ学習する。(学習者談)」ということやサポーターの支援がなくても学習が継続したことなどから自己管理学習のできる人だと言える。このように一定の自己学習能力はあるとは言え、日本人との交流も学習時間も少なく、生活上も日本語にあまり不自由を感じていない学習者に、日本語を学習する意味や楽しさをどうすれば見出してもらえるのだろうか。もっとも重要なのは、学習したことがすぐ現実に使えるということだろうと思う。「本当に通じた、使えた」という喜びが、学習意欲に直結しているように感じる。そういう意味では、今回の教材は適切であったと言っていいのではないだろうか。また学習者の教材に対する評価も高かった。スクーリング時に学習者から何度も聞いたのは、見開きになって中国語スキットと日本語スキットが対比して見られ、辞書を引かなくてもいいからとてもいいということだった。辞書を引くのが面倒だというより、時間がないので少しでも手間のかからない教材が求められたのだ。また学習者からも「使える表現が多い」という感想があったが、買い物や職場など実際の場面で使えるものであったこともよかった。学習した表現をサポーターと電話で練習した後、実際に使ってみることができたからだ。

事実サポーターは「この場面の言い方、職場で試しに使ってみたら、通じたよ」と報告されたことがあったという。また時間のない人たちにはテープ教材が欠かせない。この学習者にしても、昼食を家で食べるときテープを聞き流していたりと、集中して学習するというより「ながら学習」が主であるからである。

学習効果

学習者自身の最終アンケートにもあるように、なんとと言っても「外で生の日本語を聞いたり使ったりするとき、以前より積極的になった」ということが、今回の支援の一番の成果だろうと思う。それは11月に学習者から所沢センターに「中国からの研修生が帰国するので、送別会でのあいさつを考えている。何か例文はないか」の問い合わせがあったことなどから察せられるが、スクーリング時の学習者からの様子からもうかがい知ることができた。1回目のスクーリングと比べると、3回目の最終スクーリング時の学習者には自信が感じられるようになっていたからだ。通信学習終了2ヶ月後の電話では、人が少なくなった残業時間に数人の日本人と話をしているということを言っていたが、そういうことにも少なからず影響しているだろう。学習した表現を実際に使ってみることで使える表現を増やしていったこと、それが日本語使用への自信につながっていったと思われる。もっとも学習者に日本人と話してみようという積極性があったことが大きい。

最後は自学自習のみになってしまったが、先日の電話で学習者から「次の福島センターの交流会にサポーターの1さんは来るのか、ぜひ来てほしい」というサポーターあての伝言を頼まれた。サポーター自身も通信学習終了後2度ほど電話をしたということで、以前より確実につながりは深まっている。

7. 終わりに

今回の通信コースは3例という限られた数であり、断定的な結論は導き出すことはできないが、現時点で見えてきたことおよび今後の課題を整理したい。

教材の改善について

今回試用した開発教材については、次の観点からの改善を図りたい。

a. 通信による支援者とのペアワークを促す工夫

支援者とのペアワークが活発に行われるように、教材の中にロールプレイなどの応用問題を盛り込む。ペアワークについて支援者用マニュアルを付帯させることも必要かも知れない

b. 周囲とのインターアクションを促す工夫

自学自習が教材の中だけで完結するのではなく、生活の中での主体的な学習活動やコミュニケーション行動に結びつくように、周囲の人々とのインターアクションを促進するような教材づくりを工夫する。例えば、会話の話題提供として、インタビュー項目を盛り込むのも一案だろう。そのことは同時に、教材の中には、周囲の人と生のコミュニケーションをするための素材として活用できる話題がいろいろあるのだということを意識化させることにもなるだろう。

c. 自学自習用としてより使いやすい教材へ

今後学習者からのフィードバックを得ながらより使いやすい教材を目指す。今回の通信コースとは別ではあるが、他地域で『こんなとき会話 - 職場編 -』を教材モニター 5 名が使用した結果では、全員が車通勤の車中で聞き流している。聞く回数は多くて数回程度であるが、「日本語のみで録音された部分を繰り返し編集してほしい。」という意見があり、編集の工夫で、より使いやすくなると思われる。

既存教材の自学自習用に向けた改訂についても検討する。今回の『日本の生活とことばシリーズ - 病気 - (改訂版)』、『同 - 面接 - (改訂版)』の場合、限られた時間内での改訂であったため、課題の挿入や音声テープの付帯にとどまったが、今後改訂を進めるとしたら、初級者がより使いやすいように、モールステップを取り入れた大がかりな構成の変更が必要だろう。

教材開発のためのニーズ調査

今回は日本語力が初級下から中級下程度の学習者 3 人が教材メニューの中から生活場面の会話教材を選択した。来日して 3 年から数年経ても課題解決型教材に対するニーズは依然として高いことがうかがえる。場面別会話ニーズの把握を含め、自学自習用教材開発のためのニーズ把握を今後も進めたい。

支援の試行の蓄積

今回は会話能力の伸張が目的であったことから、通信による支援では電話を主

な媒体として用いた。今後もケースを重ねるにあたって、学習者と支援者側の条件を照らし合わせながら、支援の内容・方法・頻度等について柔軟な対応で臨めるようにしたい。また所沢センターが通信手段を用いて直接支援するというケースばかりではなく、地域の支援者が対面で学習者を支援するといった場合(スクーリング) これを所沢が側面からサポートするといった可能性も模索したい。

学習者の自己学習能力の育成

これは、どんなサポートが求められているかという支援者側への問いかけともなる。ケース は自学自習のスタートに立つために不可欠の自信の付与や基礎的日本語力および学習技能の伸張が課題であった。ではケース のように元々ある程度の自学自習力を持っており、自分で工夫して勉強できる学習者に対し、支援者はどのような点で自己学習能力を高めていけるのか。プログラム終了後も、支援者なしに学習者自身が目標を設定し、学習方法を選定し、学習方法及びその成果を評価するというプロセスで学習が進められるようにするためには、つまり、自己管理学習ができるようにするためには、プログラムの中でどのような支援を行っていけばいいのか。これらは学習相談の機能にも関わる問題だが、今後ケースを重ねながらこの点についても明らかにしていきたい。

今、ファックス、電話、あるいはパソコン等の通信機器を通じた支援を背景に中国帰国者も 1 人で学習できる可能性が見え始めている。集団による学習を前提としたこれまでのコースの概念とは異なり、個人の自学自習を支援するといった場合の理念と方法についてはまだ十分に確立されているとは言えないように思う。私たちは今後ニーズ把握や支援の実践を通じて、これらの点についても明らかにしていきたい。

<注>

- 1) 本稿における中国帰国者(略称帰国者)とは、日中国交回復後日本に帰国した中国残留邦人およびその同伴家族・呼び寄せ家族を指す。
- 2) これまでの所沢センターの取り組みに関しては、平成 8・9・10 年度文化庁委嘱事業『中国帰国者に対する日本語通信教育(試行)報告書 通信による日本語学習支援の試み (1999)』に詳しい。

3) 再研修

全国の自立研修センターのうち現在 13カ所で開設されている。対象は、自立研修センター修了者または帰国後 1 年以上を経過した帰国者及びその同伴家族のうち、日本語の習得が不十分である者、または高度な日本語の習得を希望する者である。

4) 「サポーター」という呼称は従来の「日本語ボランティア」と対比させる意図を持っている。隣人としての互助的な発想で、帰国者の日本語の習得を促進するさまざまな活動、さらに日本語中国語に関わらず、日本での周囲の人々とのコミュニケーションを支援する活動を行う。日本語の教え方等の支援技能の追求にはウエイトをおかない。

5) 所沢センター開発の会話教材。「病気」「面接」の他、「交通」「郵便局・商店」「銀行」「電話」「学校」等がある。基本的な生活行動場面での会話練習を通じて、語彙や表現力をつけることを目的としている。同シリーズには姉妹編として情報編もある。

6) 『中国帰国者のための日本語教育 Q & A』(文化庁文化語課)中の学習者タイプ分類参照。例としてタイプ は「[日常生活は問題ない。簡単な文法も身につけている]語彙を増やしていくことはどんどんできるはずですが。ただ、まとまった話や文章の読み書きが壁になっています。もし、語彙を増やしていくだけでなく、読み書きを目標にするのであれば、本人の興味のある分野での読み書き力を目標に細かく絞る必要があります。手伝う側にかなりの工夫が必要です。」とある。

< 資料 >

1) 学前アンケート (支援者向けと学習者向け (中国語版) がある)。

< 再研修通信コース学前アンケート >

コース開始前の学習者の概況について、ご存知の範囲で教えてください。

学習者氏名 / 年齢 / 性別

連絡先:

電話 / FAX

学習者タイプ

来日時期

学習経験・期間: 合わせて()くらい

・方法:

1. 教室や学校で / 2. 独学で / 3. 家庭教師と一緒に / 4. その他

・使用した教材名 []

就労等社会参加の状況 (または日本語使用機会の多寡)

日本語力 (日本語でできること15項目からの選択)

1. 多少不正確でも、ひらがなまたはカタカナで書かれたものが読める
2. 自分の名前や年齢、住所を日本の漢字で書ける
3. 多少不正確でも、平仮名または片仮名50音が書ける
4. 店や郵便局で店員に品物の値段を尋ねたり、品物を買ったりできる
5. 年齢や出身地等を聞かれて答えられる
6. 回覧板の通知等の意味が大体理解できる
7. 年賀状等、決まり文句の挨拶ハガキが書ける
8. 多少不正確でも、聞き取った単語を平仮名で書ける
9. 朝起きてから夜寝るまでの毎日の行動を紹介することができる
10. 待ち合わせの約束等で、時間や場所等が聞き取れる
11. 新聞記事で自分の興味ある話題であれば、内容が大体理解できる
12. 近況報告の手紙が書ける
13. 意見を求められたときに、自分の考えや意見をその理由と合わせて筋道立てて話せる
14. 自分自身の経歴や将来の予定について話せる
15. 同僚や近所の人等、日本人同士のおしゃべりが大体聞き取れる

通学時の所要時間

自学自習に使えるような時間の多寡

週()日で 各()時間程度

自宅にある道具

1. 電話 / 2. ファックス / 3. テープレコーダー / 4. ワープロ・パソコン
5. テレビ・ラジオ・ビデオ / 6. 日中辞典 / 7. 中日辞典
8. 日本人向けの漢字辞典

使える方法

1. 日中辞典を引く / 2. 中日辞典を引く / 3. 漢字辞典を引く
4. 日本語のテープを聞きながら学習する
5. わからないことを周囲の人に聞く

講師対応について

・学習者にとって都合のよい方法 (中心にするものに、その補助手段として使うものに)

1. スクーリング / 2. FAX / 3. 郵便 / 4. 電話

・予定される講師対応

(スクーリングの場合は)

- ・頻度は () 月に () 回
- ・曜日は () 曜日
- ・時間帯は (:) から (:)

(通信による対応の場合は)

- ・頻度は
- ・曜日は
- ・時間帯は

学習者の大まかなニーズ

- ・読書話聞について
- ・生活行動面について
- ・その他

備考

2)ペアワーク後、記録テープとともに、学習者に送付したコメントの例

3)「こんなとき会話 バス・道聞き編」見本

【2回目】

新出語彙(次回から使えるといいだね) ルビ・中国訳付き、ここでは省略

- ・胃炎 ・入院する ・退院する
- ・遠い ・遠くない ・何と言う 病院ですか
- ・上の娘 ・二番目の娘 ・今までに

言い間違い(右側は正確な言い方です。 はそのままでも意図は伝わります。()の中の助詞は、今は言えなくても大丈夫です)

はい、 さんです。 はい、 です。
少し ゆっくり になりました。 少し、良く になりました。

自転車 6分です。 自転車で、6分です。
この「で」は手段・方法を表す助詞です。中国語の「喘～」に相当します。

例:バスで行きます。 / 石鹸で洗います。

娘 会社 仕事 忙しい。 娘(は) 会社です。 仕事(が) 忙しいです。

(「毎日、病院に行くんですか」の問いに)

毎日 病院に行きました。 ない。 毎日じゃないです。

(娘さんお元気ですかの質問に)

娘 気持ちいいです。 娘(は) 元気です。

「気持ちいい」は、「今日は涼しくて、気持ちいいね。」等と使います。

いちがつまえ いっかげつまえ / ひとつきまえ

聞き間違った所

- ・今までに 何か大きな病気をしたことがありますか。
- ・息子さん、中国で 何か大きな病気をしたことはないんですか。
(テキストにないのに)使えたもの
- ・糖尿病 ・腎臓炎
- ・すっかり良くなりました
- ・お大事に

